

実践編

実際に使えるワークシートつき

ワークシートを活用した園内研修で園全体で「学びの芽生え」を考える

園全体で学びの芽生えを考えるため、園内研修を活用してみましょう。
ワークシートを使って幼児期の「学び」への理解を深め、
具体的な援助の方法を考えていく研修の進め方をご紹介します。

付録のワークシートで子どもの気づきや気持ちの動きを共有

園全体で「学びの芽生え」を促す援助を行っていくうえでは、園内研修が大きな役割を果たします。ベネッセ次世代育成研究所の磯部頼子顧問は次のように説明します。

「学びの芽生えを促すには、保育者が子どもの気づきや気持ちを十分にとらえる必要があります。子どもの見方は保育者によって異なりますから、園内研修で意見を出し合ううちに幼児理解が深まり、援助の幅も広がっていくでしょう。話し合いを通じて子どもへの接し方の方針がまとまっていくよさもあります」

子どもの姿について意見を交わし

◎監修



東京家政大学 准教授
佐藤 暁子



ベネッセ次世代育成研究所 顧問
磯部 頼子

合う研修では、保育の一場面を取り上げて共有する方法が効果的です。共有の仕方は、ビデオや写真、文章の記録など用意しやすいもので構いません。本誌では今回は、子どもの気づきや気持ちの変化を理解しやすいように4コマのイラストで流れを表したワークシートを用います。ワークシートには保育者が自分の考えを記入するスペースが設けられており、書くことで考えが整理され、意見交換が活性化しやすいといったメリットもあります。

研修をその場だけで終わらず、実践に結び付けるにはどのようなことに気を付けるべきでしょうか。東京家政大学の佐藤暁子先生は、研修をきっかけに、保育者が日常会話の中で子どもの姿を話し合う関係をつくってほしいと話します。

「研修を通して『ほかの保育者と



話し合うことは自分の成長につながる』と実感すれば、日ごろからほかの保育者に子どものことを話したい、相談したいという気持ちが生まれるでしょう。そのような風通しのよい環境をつくるためにも、研修では全員が自由に発言しやすい雰囲気づくりを心がけてください」

ワークシートを使った研修のよさ

- ◎記入する時間を設けることで個々の保育者が自分の考えを整理できる
- ◎記入してから話し合うため、意見交換が活性化しやすい（若手の保育者も発言しやすい）
- ◎ひとつの事例を共有するので、子どもの姿について多様な見方を知ることができる

ワークシートを活用した園内研修の進め方

「学びの芽生え」を促す援助を園内で考える研修として、ワークシートを用いた方法をご紹介します。P.10以降に3枚のワークシートを掲載しています。いずれも、実際の

保育で見られ、学びの芽生えを考えるうえで大切な場面を取り上げていますから、ワークシートをコピーしてそのまま研修に使っていただけます。また、それぞれの園が抱える課

題やテーマに沿って、同様のワークシートを作成しても有意義な研修になるでしょう。

研修の進め方

1 研修についての説明（5分）

ファシリテーターが研修の流れとねらいを説明します。ワークシートの概要とともに、STEP①～③に沿って自分の考えをまとめることを伝えます。
※ワークシートのみコピーして配付し、解説はファシリテーターが持っておいてください。

2 ワークシート記入（10～15分）

個々の保育者がワークシートに記入します。「正解はない」「思ったことは何でも書いてよい」などと伝えると、自由な考えを書きやすくなるでしょう。



3 ワークシートをもとにした話し合い（20～30分）

記入内容をもとに話し合います。順番に発表するよりも、ひとつの考えを広げたり、反対の考えと比較したりすると、話し合いが深まりやすくなります。



4 まとめ（10分）

研修を通して学んだことや感じたことを、発表し合います。

ワークシートの構成

ワークシートでは、遊びの中で「学びの芽生え」を促す援助を、3つのSTEPでとらえています。

STEP ① 子どもの気づき・育ち

その場面での子どもの気づきや気持ち、育っている力などをとらえる

STEP ② 学びの芽生えを促すための見通し

①を踏まえ、保育者が遊びの展開を見通して、次に子どもに気づいたり考えたり、学んだりしてほしいことを考える

STEP ③ 具体的な援助

②を実現するための具体的な援助の方法を考える

研修では、まず個々の保育者が4コマのイラストをもとにSTEP①～③をワークシートに記入。その内容をもとに話し合い、子どもの見方や援助に関する考えを深め、共有することをねらいとします。

ファシリテーションのポイント

◎すべての意見を尊重し、受け入れる

すべての意見を尊重することで発言しやすい雰囲気になります。例えば、若い保育者が遠慮していたら、「〇〇さんはどうかな」と発言の機会をつくり、「そういう考え方もあるね」などと受け入れる姿勢を示しましょう。

◎自分の意見を述べ過ぎない

通常、ファシリテーターは、園長や主任など、指導的立場にある先生が担当します。ファシリテーターが「この場面は、こう考えるべき」などと意見を述べ過ぎると、参加者がその考え方に影響されてしまうことがあります。ファシリテーターは、話し合いの調整役に徹しましょう。

◎似ている場面の経験や異なる意見を聞いてみる

話し合いが停滞したら、「似ている場面を経験したことはあるか」「異なる考え方をした人はいるか」「自分が子どもの立場だったらどう感じるか」といった投げかけによって、参加者の視点を変えてみるとよいでしょう。

◎結論を出す必要はない

結論や正解を出す必要はありません。「今日の話し合いをもとに、自分の保育を見つめ直し、明日からの実践に生かしてください」といった言葉で締めくくるとよいでしょう。

ヤゴのえさはオタマジャクシ!?

名前: _____

年齢と時期 5歳児・5月 場面 保育室

あらすじ イツキとリョウが園の池でヤゴを捕まえ、飼うために図鑑でヤゴのえさを調べました。ヤゴがオタマジャクシを食べることを知ったリョウはある行動に…。



Q 左のシーンを見て、STEP①~③について、あなたの考えを書きましょう。

STEP ①
子どもの気づき・育ち

STEP ②
学びの芽生えを促すための見通し (保育者の願い)

STEP ③
具体的な援助

ファシリテーター向け

園内研修ワークシート1 「ヤゴのえさはオタマジャクシ!？」 研修の進め方・解説

考えの相違をきっかけに命の大切さへの理解を深める

ヤゴを捕まえた子どもは「ヤゴを育てたい」、オタマジャクシを育てている子どもは「オタマジャクシを守りたい」といった自分なりの目当てをもち、それを実現するために何をすればよいか、またどのように相手を説得すればよいかを必死に考えています。答えを出すのが難しい場面ですが、自分とは異なる考えをもつ人がいることにまずは驚き、次第に相手の考えに耳を傾け、お互いの意見を聞き合う体験ができるよい機会となるでしょう(磯部)。

解説のポイント

STEP ①
子どもの気づき・育ち

最初に子どもの気づき・育ちを共有して、話し合いの足がかりとしましょう。例えば、「どの生き物にもエサが必要と分かっている」「分からないことは図鑑で調べればよいという知恵がある」などと読み取り、共有することで、次にどのような気づき・育ちをうながしたいかが見えてきます。

このシーンでは、子どもたちの根っこにある気持ちに気づくことも大切です。「ヤゴ派」と「オタマジャクシ派」の子どもがそれぞれの主張を譲らないのは、どちらにも「自分が捕まえた生き物は大切にしたい」という強い気持ちがあるからではないでしょうか。この視点を共有すれば、すべての子どもの考えを尊重した援助の仕方へと、話し合いが展開するでしょう。

STEP ②
学びの芽生えを促すための見通し (保育者の願い)

意見が衝突してケンカにも発展しかねないシーンですから、研修では、子どもの話し合いをどのような方向に導いていくかが、重要なテーマになるでしょう。参加者から、「自分とは異なる考えをもつ人がいることに気づくようにしたい」「みんなが納得のいくまで考えをぶつけ合う体験をしてほしい」といった発言を引き出し、みんなで考えを深めていくとよいと思います。

子どもに命の大切さを考えてもらううえでも、よい場面です。「飼うことが難しい生き物がいることに気づくようにしたい」「生き物を飼うことに伴う責任を意識してほしい」といった参加者の言葉をきっかけに、具体的な援助について話し合うとよいでしょう。

STEP ③
具体的な援助

このシーンで学びの芽生えを促す援助としては、「結論を急がず、子どもたちを見守りながら十分に話し合うように促す」「どのような結論を出すにしても、すべての子どもが納得できるようにする」などが考えられます。こうした発言が参加者から出たら、そのために必要な声のかけ方などを話し合い、より具体的な援助を探っていきましょう。

子どもの出した結論が、保育者が望むものとは異なったときの援助も想定しておきましょう。「子どもがヤゴを飼いたいという結論を出したら、毎日、エサとして何を、どれくらいあげればよいかなどを考え、現実的に可能かどうかを判断するように導く」といった援助が考えられます。

- ほかに保育者が経験しそうな場面
- カエルやトンボなど、エサをあげるのが難しい生き物を飼いたがっている。
 - 自分が栽培した野菜の収穫時に「かわいそう」といやがっている子どもがいる。
 - 園で飼っているペットが死んでしまったとき、みんなで命の大切さを改めて考える。

グループ内で意見が対立!

名前: _____

年齢と時期 5歳児・12月

場面 保育室(遊園地ごっこの準備①)

あらすじ グループごとに乗り物を作って遊ぶ「遊園地ごっこ」の準備。あるグループでは、男の子はジェットコースター、女の子はメリーゴーラウンドをつくりたいと主張し、なかなか決まりませんでした。



Q 左のシーンを見て、STEP①~③について、あなたの考えを書きましょう。

STEP 1

子どもの気づき・育ち

STEP 2

学びの芽生えを促すための見通し (保育者の願い)

STEP 3

具体的な援助

ファシリテーター向け

園内研修ワークシート 2 「グループ内で意見が対立!」

研修の進め方・解説

みんなが納得して次の活動に進める援助を

お互いが自分の考えを主張して譲らない状況は、協同的な活動の中ではしばしば見られます。活動への意欲を高めるためにも、全員が納得したうえで次の段階に進めるようなサポートが必要になるでしょう。この場面での有効な援助としては、主張する際にはきちんと理由を述べる、他のグループに目が向くようにして視野を広げる、などが考えられます。どのような結論が出るにしても、それぞれの子どもが「自分が考えて決めた」という実感をもつようにしたいところです(佐藤)。

解説のポイント

STEP 1

子どもの気づき・育ち

このシーンでの気づき・育ちには、「『年長さんに作ってもらったのに乗った』という発言から、過去の経験が生きていることがわかる」「年長として、年下の子どものために何かをしたという気持ちが育っている」などが考えられます。さらに、小学校での学びにつながる育ちとして、「『遊園地の乗り物は何を作るか話し合っただけ』という保育者の投げかけた課題を自分自身の課題としてとらえる力が育っている」ということに保育者が気づくことが大切です。

3コマめでほかのグループの意見を聞く姿からは、「周囲の情報を集め、自分たちの活動を決めようとする力が育っている」といった、協同的な活動で大切にしたい育ちも読み取れます。

STEP 2

学びの芽生えを促すための見通し (保育者の願い)

「対立」から学びの芽生えをうながすためには、どのような展開が望ましいのでしょうか。協同的な活動のよさを生かすためにも、「単に希望を主張するだけでなく、相手に理由を伝えられるようにしたい」「クラス全体の目的を達成するために、自分たちのグループはどう動くべきかを考えてほしい」といった発言が出るように思います。

活動が工作に移ったあとも、協力して一生懸命に取り組むための配慮も求められます。参加者の「みんなが納得するかたちで決めることで活動への意欲を高めた」といった発言を、みんなで共有しておきたいところです。子どもたちには、全体の中の自分を意識してほしいところです。

STEP 3

具体的な援助

みんなが納得するかたちで決めるための援助としては、「『ひとりずつ理由を話して考えてみよう』と、相手の言い分に耳を傾けるように促す」「じゃんけんやクジで決めるのではなく、時間が許す限り、子ども同士で話し合うようにして結論を出す」などが出てくると思います。ほかにも、「対立」を「協同」へと変える援助についてアイデアを出し合うことで、参加者一人ひとりの援助の幅が広がっていくでしょう。

子どもがグループから学級全体へと視点を広げるうえでは、「『他のグループとも話し合っただけ』などと、学級全体の目的に気づくように導く」といった援助が有効であることも共有するとよいでしょう。

ほかに保育者が経験しそうな場面

- 演劇の配役を決める際、自分の希望を譲らない。
- みんなが最初に走りたいと主張して、リレーの順番がなかなか決まらない。
- 生活グループの名前を決めたいが、それぞれが好きな名前を主張して、なかなか決まらない。

失敗は成功のもと!?

名前: _____

年齢と時期 5歳児・12月 場面 保育室(遊園地ごっこの準備②)

あらすじ メリーゴーラウンドのグループは、問題が次々に浮かび上がって、なかなか満足のものが出来上がりません。子どもたちはアイデアを出し合って何とか解決しようと試みます。



Q 左のシーンを見て、STEP①~③について、あなたの考えを書きましょう。

STEP 1
子どもの気づき・育ち

STEP 2
学びの芽生えを促すための見通し (保育者の願い)

STEP 3
具体的な援助

ファシリテーター向け

研修の進め方・解説

長期にわたる活動のよさを生かして協同性を育てたい

よりよいものを目指して試行錯誤するという貴重な経験が、長期にわたって続ける活動のよさです。このような場面では、力を合わせれば問題を解決できるという前向きな気持ちを支えながら、一人ひとりの子どものアイディアを出し合って問題を解決していく経験は、ディアを引き出し、グループ内につないでいくような援助が子どもの協同性を育てるうえで大きなプラスになるでしょう。大切にになります(磯部)。

解説のポイント

STEP 1
子どもの気づき・育ち

1・2コマめで読み取れる育ちとして大切なのが、「問題点があっても、原因を探し、試し、修正しようとする気持ちが育っている」ということです。最初に、この育ちを共有することで、保育者がどこまでの援助が必要かを判断しやすくなるでしょう。さらに、参加者から、「グループの中でお互いの意見を取り入れながら問題を解決しようとする力が育っている」といった発言を引き出し、子どもに協同性が育っていることも確認しておきましょう。

また飾りつけの問題を解決する姿からは、「過去の工作の経験を活用しようとする力が育っている」ということも読み取れます。

STEP 2
学びの芽生えを促すための見通し (保育者の願い)

このシーンで望ましい遊びの見通しとしては、「みんなでアイディアを出し合えば、よりよいものが作れることに気づくようにしたい」「みんなで苦労して作品を完成させたときの達成感を味わってほしい」などが考えられます。どちらも、協同的な活動では大切な視点として、園全体で共有しておきたいところです。

協同的な活動には仲間とのコミュニケーションを通して、子どもが自分自身を認めていくという効果もあります。参加者から「自分の意見がグループに役立ったという実感から、自分を尊重する気持ちが育ってほしい」といった発言が出たら、そのことについてほかの場面もあわせてみんなで考えるきっかけになるでしょう。

STEP 3
具体的な援助

子ども同士の学び合いをより深める援助としては、「『よい考えだね』『〇〇さんがこんなことを言っているよ』などと、子どものアイディアを認め、他の子どもにつないでいく」といったものが考えられます。このように子どものアイディアを大切に周囲と結びつけていく援助によって、遊びはより高度になり、一人ひとりの自尊心も育っていくでしょう。

子どもが飾りつけで困っているシーンでも、「ずっと前に似たようなものを作ったことがなかったかな」と、過去の経験を生かして問題を解決できるようにするなど、あくまでもヒントを提示するにとどめ、子ども自身が気づいたり、考えたりする援助が望ましいでしょう。

ほかに想定される保育の場面

- ◎ドッジボールでなかなか勝てないグループが作戦を練っている。
- ◎グループでアイディアを出し合い、劇のストーリーを考えている。
- ◎役割を分担して卒園制作の作品づくりに取り組んでいる。

ベネッセ次世代育成研究所では、園での事例を集めた冊子『幼児の遊びにみられる学びの芽』を刊行しています。冊子の詳細はホームページからもダウンロードできます。

<http://www.benesse.co.jp/jisedaikin/>